

開発途上国との国際交流から得た学生の学び

—2012年度カンボジア・スタディツアー報告—

中山 亜弓*・澤田 由美・谷野 宏美

新見公立大学看護学部

(2013年11月13日受理)

新見公立大学・短期大学カンボジア会の活動として、「カンボジア・スタディツアー」を2012年度も実施した。ツアーの内容としては、N G O団体が運営する支援村等を訪問し、開発途上国の生活環境に触れること、小児病院を訪問し、医療の現状を知ることである。その結果、医療格差のため農村地帯での医療設備は行き届かず、一般市民に保健・医療の知識がないことから、日本では予防や治療ができる疾病で子どもが亡くなっている現状である。衛生、栄養、妊婦指導などを継続的に行っているが、保健・衛生の観念が浸透していないことが課題であった。学生はカンボジアの医療や生活の現状を実際に見て、感じ、現地の人々や子どもたちの笑顔に触れることができ、カンボジア・スタディツアーはたくさんのことを気づかせてくれる場であったことを認識することができた。

(キーワード) 発展途上国、国際交流、学生

カンボジアでは、1970年代のポル・ポト政権による知識階級の大量虐殺や、その後の20年にわたる内戦によって、この国の医療システムは崩壊した。政府は医師や看護師の育成に力を入れているが、指導する人材や臨床実習などの教育施設が不足しているため、医療水準は依然低いままである。そして、カンボジアの子どもの死亡率はアジアで最も高く、5歳未満児死亡率は2011年43/1000(日本は3/1000)である¹⁾。その死因の大半は下痢や栄養失調など、予防できる病気で亡くなることも少なくない。また、子どもが病気になるでもすぐ病院には行かず、医師の指示のない売薬を使用したり、民間療法などに頼るため、手遅れになり助かるはずの命が失われているのが現状である。

新見公立大学・短期大学カンボジア会の活動である、「カンボジア・スタディツアー(以下、ツアーと略す)」を2012年度も実施した。ツアーの内容は、①医療の現状を知るため、日本人看護師が働いているアンコール小児病院の訪問、②発展途上国の生活環境に触れ、現地の人々との交流を目的に、岡山県に本部を置くN G O団体が運営する地雷障害者支援センターおよび自立村、子どもセンターの訪問、③カンボジアの文化を知るため、アンコール遺跡などシェムリアップ市内訪問である。今回のツアーでは、カンボジアの医療の現状を知り、今の自分ができる国際支援・ボランティアとは何かを課題にして実施したので報告する。

1. 研修内容

1) 研修期間

2013年1月8日～12日の5日間

2) 研修先

カンボジア シェムリアップ

3) 参加者

学生 7名(看護学部1年7名)

教員 2名、学外1名

4) 巡回医療視察

巡回診療をされている医師と小学校2校と1家庭の同行訪問を行った。訪問した小学校の教員や家族から、現



写真1 巡回診療視察

*連絡先: 中山亜弓 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

在の健康状態や近くの住民の情報を聞いていた。この日、特に健康状態を崩している人はいないとのことで、実際に医療を提供している場面には遭遇しなかった。

医師は担当している地域を大体1週間～10日毎に巡回訪問しており、医療が必要な方に出会うと、病院に搬送することもあるとのこと。簡単な薬と外科処置ができる物品が入っているバグー一つでバイクで巡回をしている。

〈学生コメント〉

- ・巡回診療を見学すること自体初めてだったので、日々の健康をチェックすることや衛生面の指導することも大切なことなのだったと思った。

- ・村の様子に驚いた。日本とも全く違うし、同じカンボジアでも街とも違っていてこういうところもあるのだと実感した。

- ・病院が普及していない中、治療を待つ人のところまで定期的に通う大変さを知った。

- ・巡回診療で訪れた先の子供たちは年の割に身体の小さい子が多く、日本のように豊かな食生活を送っているのではないと改めて実感した。

- ・貧しくて病院に行くことができない人々にとってドクターの訪問はとても重要なものだったと思った。

5) アンコール小児病院ビジターセンター訪問

アンコール小児病院は、NPO法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの最初のプロジェクトとして、カンボジアの子どもたちの病気診療・治療をするために1999年に建設された。この法人は、アジアの恵まれない子供たちの支援を目的としている。また、アンコール小児病院では、現地医療スタッフなどによる医療診療・運営活動ができるように、その教育の場としての医療教育センターの役割も担っており、現地の人々への医療、衛生教育に寄与することも目的としている。

学生は病院施設内にて、アンコール小児病院の活動についてのビデオを鑑賞した。アンコール小児病院には1日450～500人以上の患者が外来を訪れており、問診によってトリアージされ、3割程度は診療が不要である。症例は、呼吸器系（上気道炎、気管支炎、重症化すると肺炎）、感染症（下痢、赤痢、腸寄生虫による感染、マラリアなど）が特に多く、交通事故、火傷、栄養失調もある。また地域医療支援として、病院受診が難しい農村部への地域巡回診療・保健教育活動をしている。この活動では、衛生、栄養、妊婦指導などを継続的に行っているが、一般市民にそれらの知識がないことから病気は減ることはなく、保健・衛生の観念が浸透していないことが課題となっている。

そして、この病院で看護師として働いている赤尾和美氏に今年も会うことができた。学内活動でも、赤尾氏のことを紹介していたため、学生は会えるのを楽しみにし

ていた。ビジターセンターのみの短時間の訪問ではあったが、赤尾氏から直接話を聞かせていただき、学生も多くの学びがあった。



写真2 アンコール小児病院訪問日本人看護師（2列目中央）と

〈学生コメント〉

- ・小児病院では看護師さんが現地の方の考え方を尊重しながら自分の考え方を伝えていくようにしているとおっしゃっていたのが印象的だった。

- ・途上国の訪問看護の話が聞け、土地にあった看護が大切なのだと学んだ。

- ・興味を持っていたことだったので、現地で働いている方と話をさせていただいて、ますます興味が湧いた。

- ・治療を行うだけでなく、医療を普及させようと活動されており、現地で活動されている日本人の看護師の方からお話を聞いたのもよい経験になった。

- ・そこで働く日本人看護師さんの貴重なお話を聞くことができ、看護師として海外で働くことに興味を持つことができた。

6) NGO支援施設訪問

NGO支援施設である子どもセンターと地雷障害者支援センター、自立村を訪問した。これらの施設は、ツアー初回から訪問している。

(1) 子どもセンター

センターでは日本での留学や就職を目標に、日本語や日本の文化を勉強している20歳までの子どもたちが生活している。寮もあり、生活をしている子どもたちの9割が孤児である。学生はグループに分かれて日本の紹介をした。互いに同年代ということもあり、話が弾んでいたようだった。（写真3）

〈学生コメント〉

- ・自立村では、住民の方が日本で働くために日本語の勉強を頑張っていた姿に感化された。

- ・同年代の現地の人と話をして、努力家なところや積極性は見習いたいと思った。良い刺激になった。



写真3 NGO 支援施設 子どもセンター訪問

- ・日本語がとてもうまかった。毎日勉強して、とても真面目で日本語で会話できたことに喜びを感じた。
- ・日本のことを勉強している人ばかりで日本のことについて興味を持って聞いてくれたのが嬉しかった。

(2)地雷障害者支援センター訪問・交流

センターにて、学生はスタッフからNGOが行っている支援や、施設での生活など話を聞いた。センターで生活している住民とセンター職員から歓迎会を開いていただき、豚の丸焼きが振舞われた。動物の肉は大変貴重で、ご馳走なので、みんなとても喜んでた。その後、子どもたちと交流を行った。日本の四季の紹介ポスター発表とゲーム、そして個々に子どもたちと触れ合った。

〈学生コメント〉

- ・言語が違ってもたったあれだけの時間で子供たちと仲良くなれたことに自分自身驚いた。子供たちの笑顔はとても輝いていて、今でも忘れられない。
- ・10歳くらいの子どもたちが自分たちより小さい子どもたちの面倒を見ていて、しっかりしている印象を受けた。しかし、縄跳びや風船、シャボン玉などで遊んでいる時は年相応の表情で楽しそうに遊んでいたのが安心した。



写真4 NGO 支援施設 地雷障害者支援センターにて子どもたちと交流

- ・初めは言葉も通じない状況で不安だったが言葉が無くとも仲良くなれるのだということを学んだ。
- ・子供達の目がキラキラしていて、純粋な子供達を見て癒された。
- ・私がこのスタディツアーで一番印象に残った場所で、どの子も本当に人懐っこい子ばかりでとても楽しく活動できた。

(3)自立村にてジャックフルーツ植樹

自立村にて、ジャックフルーツ園開墾作業を行った。その畑を今後、水遣りなどで管理をする家族と一緒に穴を掘り、苗を植えた。畑の土はとても固く、掘り起こすのが困難だったが、畑仕事をやったことのない学生は一生懸命行っていた。木は3年程で高さは3~5mになり、枝や幹、根から実はなり、ヘルメットより大きくなる。収穫時になると、甘い香りがするので、土の下に実がなくても発見できるそうだ。このジャックフルーツの実はとても高価なもので、収入源の助けになるとのことだった。

〈学生コメント〉

- ・ジャックフルーツ園では、日本と異なり乾いた風土に植樹したのが驚きだった。
- ・植樹するために土を掘ったが土が凄く固くて一箇所を掘るにも一苦労だった。農家の方の苦労が少しわかった。
- ・ジャックフルーツの大きさにびっくりした。5年後には実がついてると聞いたので5年後ぐらいにまた訪れたい。
- ・日本ではあまり聞きなれない果物だがカンボジアでは人気のある果物で、私達が植えた木が大きくなったならまた見に行きたい。
- ・現地の人々の生活を体験できたような気がしてとても楽しかった。5年後、10年後にもう一度同じ場所を訪れて自分たちが植えた木を見たい。

7)シムリアップ市内見学

アンコール遺跡、トンレサップ湖の水上生活、アキラ地雷博物館やオールド・マーケットなど訪問し、多くの遺跡や生活に触れることができた。

2. 研修を終えて、学生の学びと私たちができる国際支援

スタディツアー終了後、学生にはレポート作成を課題としている。内容は、①カンボジアに行って良かったところ、②カンボジアに行って感じる日本のこと、③今の自分ができる国際支援・ボランティアについてである。以下、抜粋して紹介する。

- ・普段何気なく暮らしていたが、十分なおもちゃも水道も電気もなく暮らすカンボジアの子ども達を目の当たりにして、自分がどれだけ恵まれた環境にいたか思い知った。そして今までより日用品や電気を大切に使うようになった。今回彼らのためにできたことはほん

の少しだが、カンボジアに行って良かった。

・この研修ではカンボジアの表と裏の両側面が見れた。表のいわゆる観光地では整備がされており発展途上国を感じさせなかったが、少し外れると電気も水道もない中で生活を送っている村がたくさんあるのだと知った。私達のあたりまえはあたりまえではなく恵まれた環境だったのだと気づけた。

・日本では当たり前がカンボジアでは当たり前じゃないことを実感した。また、カンボジアの人は子供も大人も目がキラキラしていて日本の人と違う魅力を感じた。

・衛生面や医療面などで衝撃を受けることも多く、考えさせられることも多々あったスタディツアーだった。観光地巡りなど楽しい活動も多く、学びも多いものだった。

・今回の研修で、日本では学ぶことのできない貴重な経験をすることができた。現地の人々がどんな暮らしをしているのかを実際に見ることができた。私たちが当たり前のように豊かな生活を送っていることは、決して当たり前のものではないと認識した。この学びを大切にしたい。

・カンボジアの人々を見て、1 番印象に残ったのは貧富の差だった。カンボジアが観光地として有名になりつつあり観光客が増えるということが、果たして本当に良いことなのだろうかと考えさせられた。また、わたしは現在のカンボジアしか頭になかったが、カンボジアの歴史も勉強した上で訪れたらもっともっと学べるがあったのではないかと思った。

文献

- 1) 日本ユニセフ協会・ライブラリー 世界子供白書(アクセス)
http://www.unicef.or.jp/library/pdf/haku13_09.pdf
- 2) 岡本亜紀, 岡宏美, 杉本幸枝, 矢藤誠慈郎, 難波正義: 学生の国際的ボランティア活動の育成を目指して—カンボジア研修報告—, 新見公立短期大学紀要, 27, 187-197, 2006.
- 3) 岡本亜紀, 岡宏美, 杉本幸枝, 岡本直行: 学生ができる国際貢献—2006 年度カンボジア研修報告—, 新見公立短期大学紀要, 28, 183-189, 2007.
- 4) 岡宏美, 岡本直行, 杉本幸枝, 岡本亜紀, 矢藤誠慈郎, 古城幸子: 開発途上国との国際交流から得た学生の学び—カンボジア・スタディツアーの教育効果—, 新見公立短期大学紀要, 29, 75-80, 2008.
- 5) 永尾理恵, 小見山幸乃, 寶田真美子, 岡宏美, 古城幸子, 川崎泰子: カンボジアの訪問診療の実際と看護学生の国際貢献—農村地域での日本 N G O による健康支援活動に同行して—, インターナショナル Nursing Care Research, 8(3), 99-104, 2009.

- 6) 小見山幸乃, 永尾理恵, 寶田真美子, 岡宏美, 古城幸子, 川崎泰子: カンボジア NGO 施設で暮らす子どもと看護学生の国際交流体験, インターナショナル Nursing Care Research, 8(4), 97-103, 2009.
- 7) 岡宏美, 古城幸子, 川崎泰子: 学生が行うカンボジアでの現地活動の新たな試み—2008 年度カンボジア研修報告—, 新見公立短期大学紀要, 30, 121-125, 2009.
- 8) 中山亜弓, 谷野宏美, 内藤一郎, 藤田小矢香: 国際交流から得た学生の学び. 新見公立大学紀要, 31, 199-203, 2010.
- 9) 木下照子, 小野晴子, 井関智美, 三上ゆみ: 国際交流活動から得た学生の学び—2011 年度カンボジアスタディツアー報告—, 新見公立大学紀要, 33, 155-160, 2012.